

序論)

先週は、みなさんのお祈りの中でぶじ日高バイブルキャンプが執り行われました。キャンプ参加予定者の中でコロナに感染してしまった人が出てきたり、中高科のキャンプディレクターであり、キャンプ委員会の委員長が熱をだされてキャンプに来れなくなったり、賛美リーダーであったり、小学科のキャンプリーダーになる予定だった斎藤先生たちご夫妻が、信徒の方が召されたことによって全日参加ができなくなったり、他にもカウンセラーの予定の方が葬儀でこれなくなったり。まあ、本当にキャンプが始まる前から色々な問題がおきました。それでも最後まで大きな事故もなくキャンプが守られたことを感謝しております。また、背後で祈ってくださったみなさんにも感謝します。

さて、私達はここ数週間、イザヤの黙示録といわれる箇所をみてきました。神様は、イザヤにやがてなされる【主】の日の出来事を教えることによって、彼らが【主】の懲らしめを受けながらも、決して信仰を捨てることなく、むしろ「その日」に【主】の御業がなされることを期待して、困難を耐え忍ぶことを求めておられたのだと思います。

基本的に今日の箇所はイスラエルに対する【主】の憐れみが語られている箇所ですが、私達へのメッセージでもありますので、信仰と期待をもって困難な時代を乗り越えるための励ましを受け取りたいと思います。

「その日」に【主】がされる事)

さて、今日の箇所には神様が大きいなる御業をなされる日、すなわち「その日」のことがいくつか書かれているので、私達はそれを順番に確認していきたいと思えます。

①蛇、レビヤタン、竜を打たれる

まず、【主】が「その日」になされることの1つ目として挙げられるのが、蛇とか、レビヤタンとか、竜といわれる神の民の敵を滅ぼされるということです。1節を読みましょう。

27:1 その日、【主】は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタンを、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。

レビヤタンと呼ばれる存在は、実際に存在したなにか大きな怪物のような動物のことをさすのか、それとも当時の神話で語られていた存在のことなのか、はっきりしません。ただ聖書的には【主】の敵として取り扱われる蛇とか、竜というものは、アダムとエバを誘惑し、今で私達の心に働いて罪を犯させようとするサタンの事を指しています。

神様は、私達に罪を犯させる誘惑の大本となるような存在、霊的な敵対者を、その鋭く大きな強い剣によって、完全に打倒してくださるお方なのです。

ですから、【主】が御業をなされる「その日」というのは、私達が完全にサタンに勝利する日であり、【主】が完全にサタンを打倒してくださる日です。

これはとても大きな恵みの知らせだと思います。なぜならば、この竜とか、レビヤタンと呼ばれる蛇さえいなくなれば、私達は罪へと誘惑されなくてよくなり、私達は、罪との戦いをいつまでも続けなくてよくなるのです。これはとっても大きな恵みの知らせではないでしょうか。

②世界の面を満たすようにしてくださる。

次に【主】が、その日にしてくださることがなにかというと、【主】は昼も夜も徹底的に守り通して下さり、【主】の栄光を現す実を世界中で実らせるようにして下さるということです。そのことを歌っているのが2節から6節の部分です。一緒に読んでみましょう。

27:2 「その日、麗しいぶどう畑について歌え。

27:3 わたし、【主】はそれを見守る者。絶えずこれに水を注ぎ、だれも害を加えないように、夜も昼もこれを見守る。

ここで「麗しのぶどう畑の歌」が登場してきます。実はこれは、イザヤ書5章で語られていたぶどう畑の歌のアンサーソングとなっています。アンサーソングというのは、5章の歌で取り上げられていた問題の答えとなる歌が、この「麗しのぶどう畑の歌」ということです。

イザヤ書5章では、イスラエルのことをぶどう畑に例えてどのようにうたわれていたかということ、1節、2節ではこのように歌われていました。

5:1 「さあ、わたしは歌おう。わが愛する者のために。そのぶどう畑についての、わが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹にぶどう畑を持っていた。

5:2 彼はそこを掘り起こして、石を除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、その中にぶどうの踏み場まで掘り、ぶどうがなるのを心待ちにしていた。ところが、酸いぶどうができてしまった。

これは、神様が、イスラエルに対して、【主】の栄光を現す良い実を実らすことを求めて、その環境を整えてあげていたのに、彼らはその【主】の愛を無駄にして酸いぶどう。つまり、腐ったぶどうの実を実らすようになってしまった。ということです。確かにイスラエルは他の国では経験することができないような、神様の恵みの御業をいくつも経験していました。それにもかかわらず、神様の律法に逆らって弱いものをいじめ、偶像礼拝をし、人の力に頼るようになってしまっていたのです。

しかし、それはイスラエルが良い実を実らすことを邪魔する存在があったからです。だから、神様は今日の27章でなんといわれているかということ、3節

27:3 わたし、【主】はそれを見守る者。絶えずこれに水を注ぎ、だれも害を加えないように、夜も昼もこれを見守る。

つまり、【主】の日、【主】が御業をなされる「その日」には、もう二度とイスラエルが腐ったぶどうの実を実らすことがないように、夜も昼も絶えず守り続けてくださる。というのです。しかもですね。こんどは4節をよみましょう。

27:4 わたしにもう憤りはない。もしも、茨とおどろがわたしと戦えば、わたしはそれを踏みつぶし、それをみな焼き払う。

つまり、【主】は、神の民に対して怒りを持たないといってくださっているのです。【主】の日ということ、神様に怒られる日というイメージがありますが、でも、本当の神の民に対して【主】は決して怒りを持たれないのです。そして、【主】は、その【主】の民を邪魔する茨とか、おどろも、もやし尽くしてくださいます。

しかし、驚くべきことに5節をみるとすごいことが書かれています。

27:5 あるいは、もしわたしという砦に頼りたければ、わたしと和を結ぶがよい。和をわたしと結ぶがよい。

これが誰に対していわれているかということ、イスラエルじゃなくって茨とおどろに対して語られています。人々に罪を犯させる根本的な原因であるサタンは徹底的

に滅ぼされますが、イスラエルを苦しめていた茨のような人々であったとしても、彼らが【主】という砦に守られたいと思うのならば、神様と「和を結ぶが良い」と行ってご自分の民になるように招かれているのです。この和というのはシャロームという言葉がつかわれています。つまり神様との完全な平和を持つようにしなさい、神様との関係を回復しなさいと言われていているのです。

神様は、その日に、イスラエルではなかったとしても、【主】と、和を結びたいと思うものを受け入れてくださるのです。つまり、神の民でなかったものを神の民として受け入れてくださる。その結果、どうなるかというところ 6 節

27:6 時が来れば、ヤコブは根を張り、イスラエルは芽を出し、花を咲かせ、世界の面を実で満たす。」

つまり、神様の栄光を現し、地を祝福する存在として神様に召されたイスラエルは、その根を張り、その芽を出して、世界中を【主】の実で満たすようになるのです。その「世界の面を実で満たす」出来事の一部として、【主】に受け入れられた異邦人たちが【主】の民に加えられていくのです。

つまり、これはイスラエルとしてのあり方が、古い血筋によって成り立つものから、【主】に頼り【主】に受け入れられた者たちによる新しいイスラエルに創り変えられて、世界中にその恵みの実が広がるようになる。ということなのです。

だから、今、異邦人である私達が救われているのは、その【主】のご計画の一部が実現している証拠なのです。

しかし、完全な形で【主】のこのご計画が実現するためには、その時が来なければならないのです。つまり、その日がくるまでには時が必要ということです。そして、その日がくるまでの間の時間の中で、イスラエルは【主】の懲らしめを受けなければなりません。

神様の懲らしめは裁きとは違う)

では、その神様の懲らしめというのは、神様のさばきと同じなのかということではないのです。7 節を読みましょう。

27:7 主は、イスラエルを打った者を打ったように、イスラエルを打たれただろうか。イスラエルを殺した者を殺したように、イスラエルを殺されただろうか。

つまり、イスラエルを奴隷にしたエジプトや、アッシリアやバビロンを神様が打たれたのと同じように、神様は、イスラエルを打たれているのか。と質問しています。ただ、このことばは「いや、そんなことはない」という意図が隠されている表現となっています。

神様は【主】の民を時に懲らしめます。それはまるで、この民をさばいて滅ぼそうとしているかのように感じるような懲らしめをなさる時があります。だから、8節で「**27:8 あなたは追い立て、追い出し、彼らと争い、東風の日、激しい息で彼らを吹き払われた。**」といわれています。「激しい息」は「激しい風」とも訳せる言葉が使われています。東風の日に吹く風というのは、永遠に続く厳しい風ではなく、季節の変わり目に一時的に吹く強い風なのです。日本で言えば、春一番とか春の到来を告げる風がありますけども、それよりももっと激しくて被害が出てしまうような風です。けれども、やがてその風はやみます。

神様はイスラエルを懲らしめるために、そのように強く激しい風を彼らに吹き付ける事があるのです。でも、その風は一時的なものであり、彼らに赦しの実を得させるための懲らしめの風なのです。だから、9節にはこのように書かれています。

27:9 それゆえ、次のようにしてヤコブの不義は赦される。祭壇の石をすべて、粉々にされた石灰のようにし、アシェラ像と香の台を二度と立てなくすること、これが、自分の罪を除いて得る実のすべてだ。

この訳だと、まるでイスラエル側が頑張んなきゃいけないような印象の訳になっていますが、新共同訳聖書ではこのようになっています。

27:9 それゆえ、ヤコブの咎はこのようにして贖われ／罪が除かれると、その結果はこのようになる。すなわち、祭壇の石はことごとく／砕けた石膏のようになり／アシェラの柱や香炉台は／再び建つことがなくなる。

つまり、神様の贖いの御業、罪が取り除かれるための御業として、神様は懲らしめの中で、偶像礼拝の祭壇をことごとく打ちこわし、アシェラといった偶像を象徴する柱や香を炊く祭壇を壊して、それが再建されることがないようにされるのです。

つまり、神の民に対する【主】の懲らしめというのは、その民たちが聖められるためになされるみ業であり、いつわりの神から離れ、本当の神様の方に目を向かせるための導きのみ業なのです。

悟らない者の末路)

それでも、この【主】の恵みの御業を悟らない者はどうなるかという。10節、11節を読みましょう。

27:10 城壁のある町はひとり寂しく、捨て置かれた牧場のようになり、見捨てられて荒野のようになる。そこで子牛が草をはみ、そこに伏して、その木の小枝を食い滅ぼす。

27:11 枝が枯れると、それは壊され、女たちが来て、それに火をつける。これは悟りのない民だからだ。それゆえ、これを造った方はあわれまず、これを形造った方は恵みをお与えにならない。

つまり、神様からの悔い改めの導きである懲らしめさえも無視して、その神様の導きを悟らず、救いの御業を拒否するのならば、もはや創造主の憐れみや恵みを受け取ることができないのだということです。

これは新約聖書的にいうと、マタイの福音書でイエス様がいわれたこのことばと同じなのです。

マタイ 12:31 ですから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけますが、御霊に対する冒瀆は赦されません。

この御霊を冒瀆する罪というのは、私達を救いに導こうとする聖霊様の働きを否定する罪のことです。

みなさん、【主】は私達をいつわりの神から離れさせ、【主】のところに立ち返らせるために一時的な懲らしめを与えることがあります。そして、やがてイエスキリストによって与えられる贖いと救いを受け取らせようとするのです。

だから、多くの人の証の中には、罪からの脱出であったり、多くの悩みからの解放であったり、そういった困難を乗り越えた証というものが多くあります。

それは【主】が困難を通して、私達を間違ったものから離れさせ、【主】に近づけさせようとされることが多いからなのです。

だから、私達は一時的に【主】に懲らしめられたとしても、絶望をする必要はないし、ましてや【主】から離れる必要はないのです。むしろ、【主】は最終的な【主】の勝利と愛を受け取らせるために、一時的な懲らしめの中に私達を置かれることが

ある。だから、私達はその時に絶望をするのではなく、このようにイザヤ書などで語られている【主】の日に対する預言を思い出し、ますます、【主】を信じ、信頼して歩いていく事が大切なのです。

【主】は一人ひとりを大切に収穫される)

そして、そのようにして苦難の時を信仰と忍耐をもってのりこえていくとどうなるかということ、12節

27:12 その日、【主】はあの大河からエジプト川まで穀物の穂を打ち落とされる。イスラエルの子らよ、あなたがたは一人ひとり拾い上げられる。

「あの大河からエジプト川」というのは、本来、イスラエルが神様から与えられるはずだった約束の地の領土です。ただ、イスラエルが勝手なことをしたのでその本来の約束の地よりももっと小さい領土になってしまいましたが、【主】の日には神様の約束は完全に成就するのです。そして、神様はその日に、一人ひとりを拾い上げてくださるのです。

最終的には礼拝者となる)

そして、最終的にはどうなるかということ 13節

27:13 その日、大きな角笛が鳴り渡り、アッシリアの地にいる失われていた者や、エジプトの地に追いやられた者たちが来て、エルサレムの聖なる山で【主】を礼拝する。

失われた人、追いやられた人というのはイスラエル人だけに限定しなくてもよいでしょう。【主】の民だけど、この世の偽りの神に騙されて失われてしまっていた人たちが。神様はそのような人たちを救い出して、【主】の礼拝者として整え、【主】を喜びをもって礼拝するようにされるのです。

最初にお話ししましたが今回のバイブルキャンプは、キャンプが始まる前から実に色々な問題が発生しました。ある意味ではサタンの攻撃ではないかと思えるぐらい、次々と問題がおきました。でもですね。このキャンプの中で子どもたちは本当に心から喜んで【主】を賛美していました。賛美は礼拝です。だから、子どもたちは心から、神様を礼拝することを喜んでいました。

コロナ前のキャンプに来ていた子どもたちも、皆、それなりに賛美が好きだったけど。特に私がずっと担当している中高科のこどもたちは今回ほど、喜んで賛美することはなかったのではないかなあ。と思うぐらい【主】を賛美していました。なぜでしょうか。【主】が彼らを礼拝者にするように働かれたからだと思います。

最終的な【主】の目的は、私達を本当の礼拝者として整えることなのです。そのために【主】は、私達にイエス・キリストの和解を与えてくださり、時には懲らしめをもって私達を悔い改めに導いてくださるのです。

ですから、みなさん。どんなに苦しみや悲しみや問題があったとしても諦めるのをやめましょう。【主】はかならず勝利してくださるお方であり、私達を守ってくださるお方であり、世界中に【主】の栄光の実を実らせるようにさせてくださるお方です。そして、私達を真の礼拝者にしてくださるお方です。

私達はこのお方を信じて、諦めずに、忍耐をもってこの世の歩みを乗り越えていきましょう。